◆贈答歌会録

担当：関寧花

二〇一六年十二月十六日に、早稲田短歌会で贈答歌会が行われた。贈答歌会では事前に告知と贈歌募集を行い、贈歌が集まった所で参加者に一首ずつ振り分け答歌を用意してもらう。歌会では贈答二首で一組とし、一人二組ずつ投票と批評を行った。以下は今回寄せられた贈答歌とそれらへの批評の一部である。

贈：夕立のごとくおまへは過ぎゆきて濡れそぼつ身に夜風のしみる　鶴　寒声

答：水鏡にいつかの君の横顔に似たる月あり　越えて駆けゆく　平井奈々

贈歌の主体の横を答歌の主体が夕立のように通過してゆく、という景が最初はふさわしく思われたが、読み込むと答歌内の「君」が贈歌の主体と対応しているとは言い切れないだろうという意見も上がった。意味がかみ合った上で主体同士の感情がすれ違っている様を巧みに描けている。

贈：君の街降り立ちまずはミスドから　いつもこのへん座ってそうだ　大村咲希

答：ケンタッキー食べて帰ろうこんな日は　いつもの信号手前で曲がる　木村健太

時間の進行や言葉の対応などは贈答としてよくできている。並行した時間の流れの中でのすれ違いの表現が巧みだ。ただ、贈歌に比べて答歌は動きがあるが、「こんな日」に具体性がなく贈歌を汲んでいるとも言えないため、単語、フレーズ単位の呼応以上の物語を読み取ることは難しい。

贈：筏の帆津々浦々の風を切りまた彼の地へと魂還る　金竹羅夢
答：留むりてあの帆を待てる星霜よ　魂ならで君が身還れ　鶴　寒声

シンプルでバランスのとれた一組であり、関係性もはっきりわかる贈答歌らしい贈答歌である。贈歌は「いつかまた」の折句になっているが答歌の作者には残念ながら伝わらなかったのが玉に瑕か。

贈：生活はお前なしでもめぐるだろう　毎朝卵を焦がしたとして　関　寧花
答：三年は長いか　どうも朝食の呪いをかけてしまったらしい　大村咲希

贈歌が未来への予測なのに対し、答歌の「三年は長いか」という唐突な言い切りは結果を経た言葉なので、時間軸が一定でないのが引っかかるポイントと指摘された。どちらにも一字空けがあり流れがブツブツと切れてしまうため、リズムはあまりよくない。

贈：身ぶるいし大きなまぶた閉じるきみ水温計になる僕の耳　平井奈々
答：ぽ・ぽ・ぽ・ぽ・ぴー　今際のきわに残るのは奴の頭のぬくもりなのか　榛葉　純

答歌主体の臨終とそれに立ち会う贈歌主体という関係の一組と読まれた。「水温系になる」という難解な比喩を「胸に耳をあてて心音を確かめる」という描写と読み拭いた、答歌作成者の読みのファインプレーが光る一組である。

贈：憐れみと本能まみれのごま油そばにいさせてあげられないや　榛葉　純
答：元気ならそれでいいんだ雪の日の隠し味だけ聞いたら行くよ　関　寧花

「憐れみと本能まみれ」は答歌も拾い切れておらず多少ちぐはぐ感が否めない。贈答共に「ごま油」に引っ張られてはいるが、それによって答歌の情報量の少なさが充分補われているとは言えない。